

---

# 仮面ライダークロッカー～始まりの物語～

sinne-キヨノリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダークロツカー〈始まりの物語〉

### 【Nコード】

N0459Z

### 【作者名】

s i n n e - キヨノリ

### 【あらすじ】

この世界は、平和な筈だった。ある日突然、不思議な者達がその平和な筈だった世界を脅かす。其処に現れたのは、クロツカスと時計を模した仮面ライダークロツカー。\*これは仮面ライダーを基にした全オリジナル小説です。苦手な方はすぐに逃げたほうが良いです。

# 1話「出会い、始まり、青年の変身」（前書き）

ララ「前書きとあとがきだけで登場します！鈴海ララです」

ルル「同じく鈴海ルル」

ララ「じゃ、今回は完全オリジナルだよ！」

ルル「他のsinne執筆小説に特別ゲストとして出てくるらしい」

## 1話「出会い、始まり、青年の変身」

「は〜」

青年が居た。

青年の名前は下樹雪人<sup>しもぎゆきと</sup>。  
フラワーチーム

F・Tという花屋で働く青年だ。

彼が溜息をついてる理由は、今月の食費諸々についてだった。

「何で、こんな風になるんだ〜……。俺って、結構金遣い荒かったっけな〜」

自分の所持金を見てもう一度溜息をつく雪人。

「バイト……。増やそうかな……。」

仕事をすでに結構している雪人にとっては、もう自分の為に使う時間は少なくなってきた。

それでも自分の生活費だけは稼がなければいけない。

「あ、雪人く〜ん！」

「あ、蕾さん」

彼女は蕾花苗<sup>つばみかなえ</sup>。F・Tの若き店長である。

「だから、雪人君。花苗って呼んでってたでしょ。で、どうしたの？こんな所で呆然として」

「いやゝ。生活費が厳しくなつて・・・」

「また！？雪人君は、金遣いが荒いのよ。もう。はい」

「え？」

花苗は雪人に手を差し出した。

「今日くらいは私が奢つてあげる。結構お世話になつてるしね」

「・・・ありがとなゝ！！蕾さん！」

「だから花苗つて呼んで！」

「はいはい」

\*\*\*\*\*

「はあ・・・はあ・・・」

少年が走っていた。

「見つけた。こっちに来い！」

「誰だ・・・」

「覚えてないのか。なら、力づくで捕まえるしかないか」

「はあ・・・はあ・・・」

少年は、追ってくる者に追いつかれないよう、全力で走る。

\*\*\*\*\*

「あゝ、良かったあ、もう、本当に今月ピンチだったんだよ。ありがとな、蕾さん」

「だから、花苗って呼んでって言うてるでしょ。じゃあね。雪人君」  
そう言つて、花苗は帰って行つた。

「ふう。良かった良かった。ん？」

雪人はあるモノを見つけた。

「君は・・・」

それは、少年だった。  
ボロボロな布にくるまってブルブル震えている。

「どうしたんだ？君は」

「ぼくは、クキル。お兄ちゃんは？」

「俺は下樹雪人。で、どうして此处でこんな事してるんだ？」

雪人はクキルと名乗った少年に尋ねる。

「ぼくは、何でだろう？何だが、追われてるみたいなんだ。ねえ、雪人お兄ちゃん。ぼくを連れてってくれる？」

自分がよく分かってないように言うクキルに対し、雪人は

「分かった。でも、俺に着いてきてもあまり養えないぞ?」

「どうでもいい。ただ、あいつらから守ってくれば良いから」

「分かった。じゃ、付いて来な」

「うん」

雪人はクキルを連れて家に帰る。

「これが、クロツカーの資格者・・・」

クキルは、雪人に気付かれない様に呟いた。

その近くでは、不思議な少女と少年が居た。

「ねえ、アレク。あれが、クキルなの?」

「そうらしいわ・・・。コトト。もう少し、彼を偵察してみるわ。  
それと、あの雪人という青年についても」

「分かった」

\*\*\*\*\*

「ねえ、雪人お兄ちゃん」

「何だ？あと、俺の事は雪人って呼んでくれ、何だか変な感じがするって言うか、悲しくなるんだ」

「・・・うん、分かった。雪人。ねえ、此処が、雪人の家？」

「ああ、クキル」

「何？」

雪人はクキルに訊く。

「本当に俺でよかったのか？」

「うん。雪人じゃないと駄目だから」

クキルは、雪人に妙な執着を持っている。  
それは出会ったときから既に分かる。

その時

「うつつ！」

「どうした、クキル」

「何だか・・・西の方向から、悪寒がする。何か、怪物が暴れているみたいだ！」

「怪物・・・」

いきなり苦しみだしたクキルに、雪人は疑問に思う。



「雪人・・・付いてきて！」

「え？あ、ああ？」

クキルは突然雪人の手を握ったかと思うと、雪人の手を引いて走って行った。

\*\*\*\*\*

「ふふふ・・・。丁度良かったわね」

「モノの破壊衝動を吸い取り、何かを怪物にする。これは、ブレイクモンスターとでも言っておく？アレク」

「そうね」

先程の少年と少女が石の怪物を引き連れている。

「あら、そちらから来てくれたようね」

其処には、クキルと雪人が居た。

「クキル、一体何なんだ」

「雪人。これを使つて！」

クキルが雪人に渡したのは時計。クロツカスの紋様が彫られている。

「それは！」

少女・・・アレクが驚いたように言う。

「これは、何だ？」

「クロックベルト。これでクロッカーに変身して！」

「・・・」

「お願い！」

必死で言うクキルに雪人は心を打たれ、受け取っていた。

「分かった。必死に言う願い事は、叶えてやらなきゃな。じゃ、行くぞ」

雪人は、クロックベルトの鎖を腰に巻きつける。  
そして、時計部分を開けて言った。

「変身」

其処には、クロッカスと時計を模した者に変身していた。

「仮面ライダークロッカー。か」

アレクは、そう言い放った。

「成る程、なら、行かせて貰う！」

続く

# 1話「出会い、始まり、青年の変身」（後書き）

てわけで、またはじめてしまった・・・。

何だか次々とはじめてしまう・・・。

もうそろそろ何か終わらせなきゃ？（全部大して進んでない）

## 2話「クキル、雪人、青年の初陣」（前書き）

カズマ「今回のあらすじは俺達です」

シンジ「何で・・・？」

カズマ「まあ良いだろ、これの本編ではまず出ないんだしさ」

シンジ「ま、いつか。前回の出来事」

カズマ「

青年、下樹<sup>しもきゆきと</sup>雪人は生活費に困る普通の花屋店員。

ある日、勤務先の店長との食事の後、クキルという少年と出会う。

そして、悪寒がすると言ったクキルに、雪人は付いていった。

そしたら、ブレイクモンスターという怪物が暴れていた。

雪人は、クキルに渡されたクロツクベルトを使って変身。

仮面ライダークロツカス・・・じゃなくて、仮面ライダークロツカ

ーになった！

」

シンジ「カズマ・・・」

カズマ「いや・・・つい、な」

## 2話「クキル、雪人、青年の初陣」

「仮面ライダークロツカーか・・・」

少女は言い放った。

其処に立っているのは、クロツカスと時計を思わせるデザインの仮面ライダー。

「クロツカスカ、俺の好きな花だな・・・。まあいい、まずは、其処に怪物を倒すんだろ、クキル」

「うん、雪人<sup>ゆきこ</sup>」

「よし、じゃあ、行くぞ！」

雪人・・・クロツカーはチェーンソーを思わせる怪物へ立ち向かって行った。

「それにしても、チェーンソーなんて、物騒なもんだな」

雪人は、軽々とブレイクモンスターを振り回す。

「何だアイツ！」

少女は言う。

「アレク、だったつけ？雪人には、これまでに居ないほどのクロツカーの資質を持っている。僕には、すぐに分かったんだ」

「……………」

アレクと呼ばれた少女は、今までに無い苛立ちを見せている。  
隣に居た少年……コトトは、アレクに

「アレク、今の僕達に勝ち目ないよ、早く行こう」

「……悔しいけど、私達にクロッカーに立ち向かう程の力はないわ、コトト。行きましょう」

「うん」

そう言つて、二人は姿を消した。

「くそっ！あいつら敵前逃亡か！まあいい、俺の相手はこっちだろ  
う！」

クロッカーは叫びながらチェーンソーのブレイクモンスターと戦っている。

「何か武器は無いのか！」

「武器……。あ、ベルトの横にある剣、そのボタンを押して！」

「分かった！」

クロッカーはクキルの言うとおりにする。

「そしたら、相手に降り下ろして！」

クロツカーはブレイクモンスターに剣を振り下ろす。

「えいやああああああああああああっ！！！！」

その時、ブレイクモンスターは崩れ落ち、中から人が出てきた。

「・・・！これは・・・」

「雪人の知り合い？」

「ああ・・・桜木英樹<sup>なぐさきひでと</sup>。俺の中学の知り合いだ」

何故、ブレイクモンスターの中に人が居たのだろうか？  
雪人にはその疑問があつた。

「なあ、クキル」

雪人は変身を解いてクキルに訊いた。

「何？雪人」

「あの、ブレイクモンスターって何だ？何故、中に人が・・・」

「・・・それについては、家に戻ってからにしよう」

「・・・ああ、コイツも、家に連れ帰るか」

\*\*\*\*\*

「で、ブレイクモンスターって、何だ？」

此処は雪人の家。

英樹は、現在雪人の家の寝室で寝させている。

「ブレイクモンスター、っていうのは、人とかの破壊衝動を動かして人を怪物の仲に取り込む。周りのモノの破壊衝動も吸い取って、破壊だけをする人形なんだよ」

「そんなものが・・・」

「うん、それを作るのは、破壊者・・・まあ、僕はブレイカーって呼んでるけどね。その人達が、ブレイクモンスターを作ってるんだよ」

「なあ、何で、クキルは、其処まで知ってるんだ？」

雪人はクキルに訊いた。

「・・・分からない、僕、いつのまにか追われてて、いつのまにかクロックベルトを持ってて、何故かその事を知ってた。でも、雪人と一緒に居れば、思い出せる気がしたんだ」

「・・・俺はな、昔空手、柔道、とか、そんな感じの格闘技やってたんだ」

「だから、結構戦闘が出来たんだ」

「まあ、な。でも、アイツ・・・雪良ゆきせが死んでから、やめたんだ。雪良が居たから、頑張っていた。アイツが居なくなつて、泣いて、泣いて、涙が枯れるまで泣いて、それで、英樹に救われたんだ。薔



さんとか、F・Tの人達にな」

雪人が過去の話をするのは、クキルが初めてだった。

雪人は、今まで妹の事を思い出して悲しくなるから、とこの話をする事を拒み続けていた。

妹が居なくなつてから雪人には何も無い毎日があつた。

悲しみのどん底から雪人を助けたのは、桜木英樹と薔花苗だった。

「ふうん……。だから、”お兄ちゃん”って呼ばれなくなかったんだ」

「……ああ……」

雪人は、寝室に行つた。

「英樹……」

「……雪人、此処は……」

「俺の家だ。お前、路上で倒れてたんだぞ」

雪人は、あえてあの事を言わず、倒れてたとだけ言つた。

「そうなのか！？いや、それにしても、変な夢見たな」

「変な夢？」

雪人は英樹に訊いた。

「ああ、なんか、変な少女と少年が、俺に羽を投げつけて来たんだ。」

そして、気が遠くなつて怪物の中に閉じ込められて暴走してるって夢。ま、何か変な奴に止められたんだけどさ。何処から夢で、何処まで現実だったんだろうな。いや、全部夢か？」

「へえ、そんなの見る事もあるんだな」

雪人は反応を示さないように言う。

「それ、お前の悪い癖だな」

「は？」

「いや、何でもねーよ。世話になつたな。じゃ」

「あ、ああ・・・」

雪人は、英樹を見送った。

英樹が帰った後、クキルは言った。

「あの英樹って人・・・雪人がクロッカーって知ってる・・・なんで？」

「アイツには、昔から変な才能あるんだよ。そのせいで虐められた事もあったんだ」

「ふうん」

続く

2話「クキル、雪人、青年の初陣」(後書き)

カズマ「2話も終わったな」

シンジ「な」

カズマ「これだけ・・・なのか？」

シンジ「らしいね」

### 3話「雪良、英樹、切なる願い」（前書き）

今回は過去の話とか、色々があるので戦闘ないです。

### 3話「雪良、英樹、切なる願い」

「……ねえ、雪人<sup>ゆきこ</sup>」

「どうしたんだ？」

英樹<sup>ひげき</sup>が帰った後、クキルは雪人に尋ねて来た。

「英樹って人、何か不思議な力持ってたの？」

「ああ、何だかな、超能力保持者だったんだ」

「超能力保持者？」

「稀に居るんだよ。あまり居ないし、アイツの力は強い方だったかな」

雪人は語る。悲しげな表情をしながら、クキルに語る。  
その図は、まるで兄弟の样だった。

「そうだな、じゃあ、最初から話すか。英樹の事も、雪良<sup>せつら</sup>の事も」

「うん」

それは、十数年前の事だった。

まだ小学校3年生だった俺は、転校して来た英樹に興味を持った。

「はじめまして、俺は桜木英樹<sup>さくらぎ ひげき</sup>。よろしく」

浮かないような、悲しげな、堅い表情の彼が教室に入ってきたとき、俺は驚愕した。

小学校3年生にしては、大人びていた事に、俺は驚いたのだ。最初こそは皆大歓迎した。

でも・・・

「何だよそれ！幽霊なんて居るはず無いだろ！」

「何でそれ知ってるんだよ！そ、それは誰にも言っていないことだったのに！」

「お前・・・何者なんだよ！化け物！」

「怪物！」「化け物！」

誰も知るはずの無い事を知っていたり、道端で誰かと話したり、感情が高ぶった時に周囲のものを浮かばせたり、普通の人間では出来ない事をアイツはしていた。

無論、人間は普通じゃない存在を否定し続ける。そんな存在だ。

自分達より強い何かがあると、怖い感じる心の弱い人間達は、彼の存在を否定した。

そう、先生までも、それを否定した。

「なあ、桜木」

「何だよ、お前も、俺を馬鹿にするのかよ」

「違う。俺はお前を馬鹿にするんじゃない。怖いとも思わない」

「じゃあ、何だよ」

「俺は、お前を信じる。お前も、俺を信じる」

「だから、何だ」

「だ〜か〜ら〜っ！俺とは友達になろうってさ」

英樹は、人を信じるのは、俺が初めてだと言っていた。

俺とは、ものすごく仲が良くなった。

俺と過ごして行く内に、英樹は超能力の抑え方とかを習得していた。

「なあ、雪人」

「何だ？英樹」

「俺さ、強くなりたいんだ。なあ、一緒に空手しないか？」

「ああ！いいぜ！」

英樹の、強くなりたいという願い。

それは、自分の強さがほしかったからだ。

超能力じゃなく、自分自身の強さがほしいって、彼が言っていた。

でも、悲劇は起こった。

雪良が死んだのだ。

「せ……雪良……」

「・・・・・・・・」

眠っている雪良に、俺は手を触れた。  
冷たくなっている。

「・・・・・・・・」

「俺、部屋、出るよ」

「あ、ああ・・・」

英樹は、俺が何も言わずとも、俺の心を読んで、部屋を出た。

「雪人・・・」

その日以降、俺は空手を辞めた。

そして、ある日の事だった

「なあ、雪人」

「どうしたんだ？英樹・・・」

「もうそろそろさ、卒業だから、仕事見つけようぜ！」

「そう・・・か・・・」

「ほらほら、君の憧れの蕾<sup>つぼみ</sup>さんの経営する花屋で働こうぜ！店員募集中だしさ」



「あ・・・ああ・・・」

それでも、俺は気が乗らなかった。とても大事なものがぽっかりと空いていた。

「ほら、雪人君！」

「蕾・・・さん・・・」

「何ボケーっとしてるの！私も誘ったじゃない。F・Tで働いてくれる？って」

「ごめんなさい・・・」

その時、蕾さんは俺の頬を叩いた。

「・・・!!」

「妹さん亡くして、気が落ちてるのもわかるけど、いつまでもウジウジしてちゃ、何も始まらないよ！」

「蕾さん・・・。俺、何か、間違ってたみたいだな。ありがとな、蕾さん」

まだ、気持ちは落ちているけど、俺は、少し元気になれた。

「俺の話は、ここまでだ」

「それで、雪人は、F・Tに入っただの？」

「ああ」

雪人は、ぼおつと空を見ていた。

クキルも、つられるように外を見ていた。

続く

3話「雪良、英樹、切なる願い」(後書き)

ちなみに雪人の年齢は23歳。  
蕾、桜木も同じ年齢。

ララ「ふえ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0459z/>

---

仮面ライダークロッカー～始まりの物語～

2011年12月5日20時46分発行